

市民プレス

2017年
(平成29年)
4月5日
第76号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
連載・武蔵野台地の小さな街の記憶 その四
大石館は「館本村」となり、分村は「引又宿」に
『廻国雑記』から『館村旧記』の世界へ
廃城となつてのち…館村名主、宮原家の出自は
- PAGE 2
『館村旧記』を引用することに・・・
館柏之軍之事 城趾の発掘調査
館村再始芝分屋舗取の次第 =志木市の歴史=
- PAGE 3
館村再起屋敷割之図
宝永二西蔵改 星野半平が描いた 武州新座郡
館村絵図 同引又、中野
- PAGE 4
引又草分けの三苗 新田芝分けの後半世紀
文化十一年 引又宿絵図が発見される

大石館は「館本村」となり
その分村は「引又宿」に

『廻国雑記』から
『館村旧記』の世界へ

四・巡歴の高僧、道興准后は・・・
修験道の本山派を統括する地位
にあつて、十ヶ月に及ぶ公的な旅の
覚えを繊細な詩文で記し、長享元
年(1480)、紀行文「廻国雑記」を
著わした。

道興は、応仁の乱で荒廃した都
を発ち、北陸道を経て越後から関
東に入って、文明十八年(1486)の
秋には、志木市の宗岡を訪れた。

本紙の前号では、本書に読み込
まれた詩文から道興の足跡を辿り、
志木市周辺に残された風光を懐古
しつつ、遙かなときの流れを味わい、
終章では、翌年の長享元年、大石
信濃守の館に招かれたとき、そこで
繰り広げられていた華やかな宴の有
様を垣間みてきた。

道興の詩に・・・
一閑興に乗じ 屢樓に登る
遠近の江山幾州を分つ
落鷹霜に叫び風颯々
白沙翠竹斜陽幽なり

四・二道興を招いたのは大石信濃
守と記されているが・・・
この日、道興を招いた館の主は、
戦死した父の三十三回忌の供養を
執り行っていたので、道興は、冥福

を祈る歌を添えて花一枝を贈った、
と記されている。
彼の亡父は、分倍河原の戦い(足
利成氏の率いる鎌倉公方勢と上杉顕房の
率いる関東管領勢との間で行われていた合
戦で亡くなった大石房重と推測さ
れ、したがって、館の当主は、当時
武蔵国の管理を任されていた守護代
(守護の下の役職)、信濃大石家十一代、
大石顕重に違いないようだ。
大石氏館の所在地を巡って・・・
本紙では、道興を招いた武蔵国の
守護代大石顕重の館は、志木市内
の「柏ノ城」としてこれまでストー
リーを進めてきた。

られ、長祿年間(1457～1460)に
築かれたと伝えられる。
また、大石氏の城館として、大
たの。

たの。また、大石氏の城館として、大
たの。

たの。また、大石氏の城館として、大
たの。

たの。また、大石氏の城館として、大
たの。

たの。また、大石氏の城館として、大
たの。

たの。また、大石氏の城館として、大
たの。

武蔵野台地の 小さな街の記憶 その四

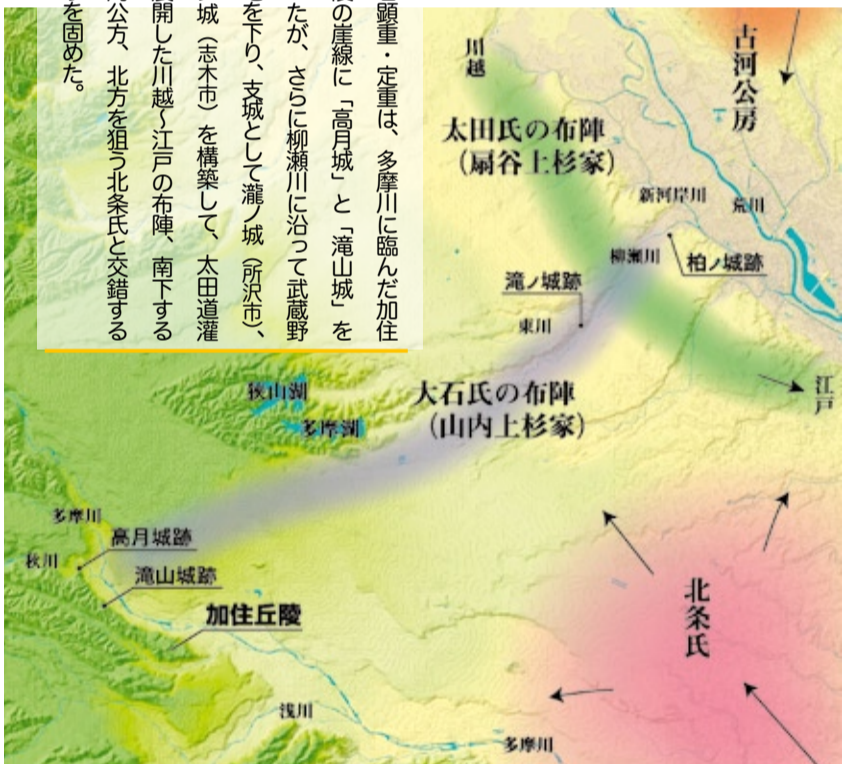
主 城 は
滝山城に移る・・・
いまに残された「滝
山城」は、高月城跡
の南東、多摩川に沿い、標高
170m、比高80mの要害に所
在する。その南側には加住丘陵が広
がり、一帯は雑木林に覆われていて、
規模が大きい。そのため、「高月城」
はその支城として機能していたと考
えられている。

大石顕重・定重は、多摩川に臨んだ加住
丘陵の崖線に「高月城」と「滝山城」を
築いたが、さらに柳瀬川に沿って武蔵野
台地を下り、支城として瀧ノ城(所沢市)、
柏ノ城(志木市)を構築して、太田道灌
が展開した川越・江戸の布陣、南下する
古河公方、北方を狙う北条氏と交錯する
守りを固めた。

鎌倉を目指して南下を目指す、
る。したがって、道興が城館を訪れ
たころ、その隣には、すでに民地が
拓かれていたと考えられる。
この板碑には、阿弥陀如来が来
迎する姿が描かれ、かつては、柏ノ
城跡(現・市立第三小敷地)に在った「城
山八幡社」の御神体として祀られて
いた。当時の村の念仏講によって建
立されたものだが、同八幡社が廃社
されたさいに、現在地に移された
という。但し、遺憾ながら、道興の訪
問以後、城館の活動記録は全く途
絶えてしまう。では、「柏ノ城」は廃
墟となつてしまったのだろうか？
四・五そのころ駿河国を出て北上し
た北条氏は、武蔵国に進出する
大石顕重、定重が守護代を務め、
道興が招かれた時(文明十五年)から
十年後の天文十五年(1546)、北条氏
は、世に知られる「河越夜戦」に大
勝して、大石氏と志木市域は北条氏
の軍門下に置かれる。
やがて大石氏の後裔は、北条氏の
本拠地だった小田原に赴き、さら永
祿四年(1562)、越後国を統一した上
杉氏が関東に進出して、諸城を落と
す。ついで北条氏の本拠地、小田原城
へと向かい、三月、志木市の大石の城
館は、上杉氏(景虎)謙信の攻略によつ
てこのとき落城した、とされている。

四・六廃城となつてのちは・・・
辺りに残留した人々(かつては仕え
ていた臣下も戻つて)によつて館の跡地は
占有され、民有地となつて村落へと変
つてゆく。後に志木市域の中核と
なつた「館村/館村」である。
ここで指導的な役割を果たした当
村の名主、宮ヶ原仲右衛門は、自ら
の眼で見た地域の暮らしに加えて、
伝承をも詳しく記述した『館村旧記』
を残した。

四・七宮原家の出自は・・・
『館村旧記』によれば、祖先の宮
原綱輝を上総国安房郡宮原に居住
した葛尾城主としているので、志木
市に居住されている宮原一族は、こ
の上総宮原氏の一族ではないかと、
推定されている(現、宮原家=嫡流
の故宮原一氏談。宮原氏は、その後、
志木に赴いて大石氏信濃守の臣下と
なつた(天文二年「1533」か?)とい
われ、真偽は別として、『館村旧記』
の中でも、大石氏の城館を守る戦
いの際には、一層熱気がこもる。
以下、『館村旧記』の一部を引用す
ることしよう。



いまに残された「高月城」は、標
高150m余り、比高40m、秋川の
断崖に建ち、東は多摩川によつて守
られていた。また、大石氏は八王子の
主 城 群 から所沢の「瀧の城」を経て
「柳瀬川」の流域に沿い、ついには
志木の支城「柏ノ城」にいたる長い
防衛線を築いたようだ。ではその守
りは一休誰に向かつていたのだろうか。
四・三大石城館群は西から東へ
八王子から所沢を経て志木へと、
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。

現在、志木市第三小学校の校地と
なり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。

現在、志木市第三小学校の校地と
なり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。

現在、志木市第三小学校の校地と
なり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。

現在、志木市第三小学校の校地と
なり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。

現在、志木市第三小学校の校地と
なり、地域一帯は武蔵野台地の縁辺
に在つて、眼下には柳瀬川が流れる。



館村旧記
http://www.city.shiki.lg.jp/
index.cfm/53,2439,134,576.html

四・八振り仮名付きの原文で

田面長者以来年数荒間敷之事
(田面長者を伝説上の人物と考える見解が有つて、この項全体の記述に疑問がもたれている)

「当村は田面郡司長勝殿の比より享保年中に及んで凡そ年数九百年余にも及びけれども、夫より以来当所に百姓町人等住居せし事又は守護人誰人といふことなど云ひ伝へ侍らざる也。然れども古昔は人家多くこれありと聞こへて、所々に墓所の跡多くこれある也。さて亦当所柏城、文明年中の比田面長者の住居ありし跡を城に築きて大石信濃守殿居城となれり。而も相州小田原北条家の幕下にして、小田原附十一ヶ城の内也。」

「当村をたて村といふに付き、館」と「館」との二字これあり。或人の云はく、「館」の字は高官の御方の旅行へ御出でありお泊りな

館の時に「館」の字を書する也、又「館」といふ字は高官の御方の其所に御殿など建て御住居ありたる所を「館」といふ也と。故に村里の村名に「館」の字付きたる所は、必ず位高き御方の御館ありし故に

「館」いふ也。然れば当所は柏城の西の丸に侍り、殊に亭の建たる所などこれあり、則ちその下の田所を今に「亭の下」と字を呼ぶ也。さればこそ「館村」と名づけたるも尤もにて理也。」

四・九 館柏之城軍之事
抑館柏之城は昔田面郡司長勝殿の住みたまふ跡也。此の城人皇百六代後奈良院の御宇、天文年中の比は太石信濃守政吉殿の居城たり。城下には町々辻小路を通し町民の編戸軒端を連ね、見世店を構えしめ賑へり。時に越後の国の官領上杉謙信輝虎卿、小田原北条氏康卿を攻めんと大軍にて河越より武蔵野辺に押し寄せらる。その刻当城へ寄せ来ると聞へしかば、籠城の用意として兵糧を込め、或は堀を浚ひ仮り堀を掛けさせ城戸逆母木を引いてぞ待ちかけたる程なく、上杉勢押し寄せ来たり陣取りして関の声をあげたりける。城中には兼ねて期したる事なれば、同時に関をぞ合はせけり。

扱て城主信濃守殿表の櫓にかけ上り敵の勢を見給ふに、その勢雲霞の如く、帷幕を並べ竹束を突並べてひかえたり。信濃守殿急ぎやぐらを飛んで下り、士卒に下知して曰く「寄せ手は多勢なれば定めて鶴翼に開きて味方を取り籠むと覚ゆるぞ。さあらん時は味方は小勢なれば千に一つも勝利を得ること難かるべし。只味方は魚鱗に連り轡をならべて打

敵の真中に割つて入り、東西南北へ四角十文字に駆け散らし前後の敵に目をくばり、大将と覚しき敵あらば組んで勝負を決す可し。又は葉武者たらば射て取るべし。兼ねて西門より射手の達者を操り出

し、番匠坂、千手堂、稲荷山の辺に伏勢を隠し置きて、敵城へ近付かば合図を定めて横矢を射させ、城の中よりは火矢を打ち出すべし。敵共引き色ならは見澄してしきりに追

い立て、溝沼、濱崎辺の深沼へ追ひ落とし、洩さず是を打ちとるべし」と委細に手だてを成敗して、いざ打立てや面々と馬物具とひしめきける。寄手は小高き所に陣取つて城の様に東西へ三町、南北へ二町ばかりの子城なれば唯一攻めとあなどつてぞ控へたる。さて信濃守殿の郎従には、宮ヶ原内膳、同主税、伊藤半人、同外記、星野一角、佐藤平馬、岸林平、榎木忠蔵等其の外矢部、岡本、林、戸沼、小沢、関口等城戸押し開き切て出で敵むらがりたる中へさつと駆け入れ、四角八方へ馬烟を立て追つ返し攻め戦う。……

城は落ち、ついに、信濃守は湯殿で無残な死を遂げる、として、この物語は終わる。

しかし、歴史を紐解いても、大石信濃守の中で、湯殿で不慮の死を遂げたものはいないので、虚構に過ぎないのでは、と断言する向きもある。しかし、神山健吉氏は、次のように述べている。

「著者の仲右衛門が本書を著するまで百六十六年が経過しており、戦闘の様子は相当部分忘却されていたため、当時まで伝えられてきたわずかな伝承を、著者は大幅に増幅し、さらに面白く潤色したのではなからうか、と。」

以上のような問題は数多いが、この本文は、天文年中(1582-1592)の柏城の城主が大石信濃守某であったこと、又、永禄四年に小田原を遠征した上杉勢の分遣隊によって柏城が攻撃を受けたことを示す唯一の資料なので、無視されるべきではなからう、という見解が定着している。

四・十 柏ノ城跡の発掘調査
「柏の城」は、武蔵野台地の崖線を天然の要害として築かれた館(又

は、岩、小規模な城)で、その後には「柏」を冠した「柏町」は、志木市内の重要な町名にもなっている。そこで、以後本紙でも、「大石氏館」とともに、「柏ノ城」の名称を使うことにしたい。

なお、『志木市史』では、河越城・江戸城・本郷城に、それぞれ「初雁城」・「千代田城」・「滝の城」の別名があるように、城周辺の風物に因んで、その特色を現わす雅名と

呼ばれるようになったのは……「館村旧記」の巻頭に、大石氏の城に因んで、その特色を現わす雅名として付けられたのではないかと記し、さらに、「柏」は「かしわ餅」原、伊藤、佐藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三(註記ニカ?)の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋敷取り。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋敷取り。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家人人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

常緑喬木の林が茂っていたのであろう、と推測している。現に城の西の丸跡にあたる元長勝院(昭和六十年二月廃寺)の境内に、志木市が特に保存樹木と指定しているヒノキの老木があるが、この木は江戸時代に、城の名を示す記念樹として植えられたと伝えられる。

幸いにも、『館村旧記』に描かれた「柏ノ城」の配置は現代の地図と重ね合わせることができ、上記したように、近年、大規模な発掘調査が行われ、大堀の跡などが確かめられたので、大石氏の城館は、屋敷では無く、まさしく「城郭」だったのである。

志木市史中世資料編の「館村旧記」に戻って、

四・十二 館村再始芝分屋敷取の次第
天文(註記永禄?)年中当所柏之城没落して、大石信濃守殿の家中並百姓町人等、悉く当所を離散し此処彼処に徘徊す。程有りて宮ヶ原、伊藤、佐藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三(註記ニカ?)の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋敷取り。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋敷取り。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家人人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

次ページに続く

東と南方向に堀を巡らす、といわれていたが、昭和五十五年(1980)七月からほぼ一ヶ月にわたる調査が志木市によって行われた。

市史専門調査委員の井上国夫氏が担当し、早稲田実業高校考古学研究室、民地所有者の協力を得て発掘作業が進められた。その結果、地表から四〜五メートル、箱形薬研(薬研は草木を砕いて粉薬をつくる道具)状の堀が姿を現わした。幅はほぼ十メートルで、大堀跡は空堀だった。

発掘調査の結果、詳細な跡地の見取り図が完成し、この絵図から当時の城郭の主要を推測することが可能になった。

左に掲げたのは、「城跡の見取り図」(『志木市郷土誌』より)、その下の柏城の城主が大石信濃守某であったこと、又、永禄四年に小田原を遠征した上杉勢の分遣隊によって柏城が攻撃を受けたことを示す唯一の資料なので、無視されるべきではなからう、という見解が定着している。

四・十一 大石氏の城館が「柏ノ城」
別名があるように、城周辺の風物に因んで、その特色を現わす雅名として付けられたのではないかと記し、さらに、「柏」は「かしわ餅」原、伊藤、佐藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三(註記ニカ?)の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋敷取り。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋敷取り。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家人人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

市史中世資料編の「館村旧記」に戻って、

四・十二 館村再始芝分屋敷取の次第
天文(註記永禄?)年中当所柏之城没落して、大石信濃守殿の家中並百姓町人等、悉く当所を離散し此処彼処に徘徊す。程有りて宮ヶ原、伊藤、佐藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三(註記ニカ?)の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋敷取り。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋敷取り。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家人人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

常緑喬木の林が茂っていたのであろう、と推測している。現に城の西の丸跡にあたる元長勝院(昭和六十年二月廃寺)の境内に、志木市が特に保存樹木と指定しているヒノキの老木があるが、この木は江戸時代に、城の名を示す記念樹として植えられたと伝えられる。

幸いにも、『館村旧記』に描かれた「柏ノ城」の配置は現代の地図と重ね合わせることができ、上記したように、近年、大規模な発掘調査が行われ、大堀の跡などが確かめられたので、大石氏の城館は、屋敷では無く、まさしく「城郭」だったのである。

志木市史中世資料編の「館村旧記」に戻って、

四・十二 館村再始芝分屋敷取の次第
天文(註記永禄?)年中当所柏之城没落して、大石信濃守殿の家中並百姓町人等、悉く当所を離散し此処彼処に徘徊す。程有りて宮ヶ原、伊藤、佐藤、岸など当所へ戻り、城の三の郭の北側に屋敷取りす。則ち本丸の前に宮ヶ原監物屋敷取る。是を上宿といふ。二の丸の郭に岸茂左衛門屋敷取る。是を中宿といふ。又三(註記ニカ?)の丸の東の方に伊藤清左衛門屋敷取る。是を下宿といふ。その東に佐藤平蔵屋敷取る。但し城のこれありし時は、北側はすべて間口十五間宛に割りたる家中屋敷取り。南側に住する輩は、岡田、榎本、矢部、岸山、渋谷、小沢等也。但し南側は間口十二間宛に割りたる家中屋敷取り。是を割り直して住す。都合家数十七軒、家人人数男女合はせて六十七人住す。右の通り館本村芝分けの根元是也。

次ページに続く

次ページに続く



上図は、武蔵野台地の縁辺に位置する「志木市立第三小学校」と、その崖下に所在する「市立中学校」に、柳瀬川の流れを加えて、当時の「大石氏館」を見据えて作製されたもの

下図は、CG画像で柳瀬川に沿った湿田を見下ろす崖線上に築かれた城館



http://hya34.sakura.ne.jp/iruma/kasiwazyou/kasiwazyou.html

次ページに続く

Table with 4 columns: Year, Name, Era, and Western Calendar. It lists historical events and dates from 1469 to 1804.



館村再起屋敷割之図

柏の城跡が民地となって、館村の基礎が築かれたのは天文十五年・1546ころとされている。上図は、『館村日記』からの引用だが、編集人が加筆、着色したもの。『館村日記』が執筆された享保十二〜十四年の後、江戸時代に加筆されたらしく、その跡と思われる文字が散見される。

以下本文を省略するが、最後には、程経て他村より移住してきた諸家のことも記されている。例えば、入間郡所沢村より三上氏が来たほか、尾崎、小野、綱島、高野氏などが追々と移り住んで開発に当たったという。

『館村日記』には、詳細な「柏之城落城後の屋敷割の図」(上図)が掲載されているが、その後移住してきた諸家をも加えた、「宝暦二年」(1723)、江戸時代中期の屋敷が書き添えられている。

つづいて開発された、「中野組之事」、「次に針ヶ谷組開発之事」に、移り、

扱館六箇郷と云ハ、上宿・下宿・新屋舗・大塚・中野組・針ヶ谷組、右是を六ヶ郷とハ云也、元禄六酉年針ヶ谷組別村になり、館ハ五ヶ郷なり。今ハ引又を添て六ヶ郷となれり……

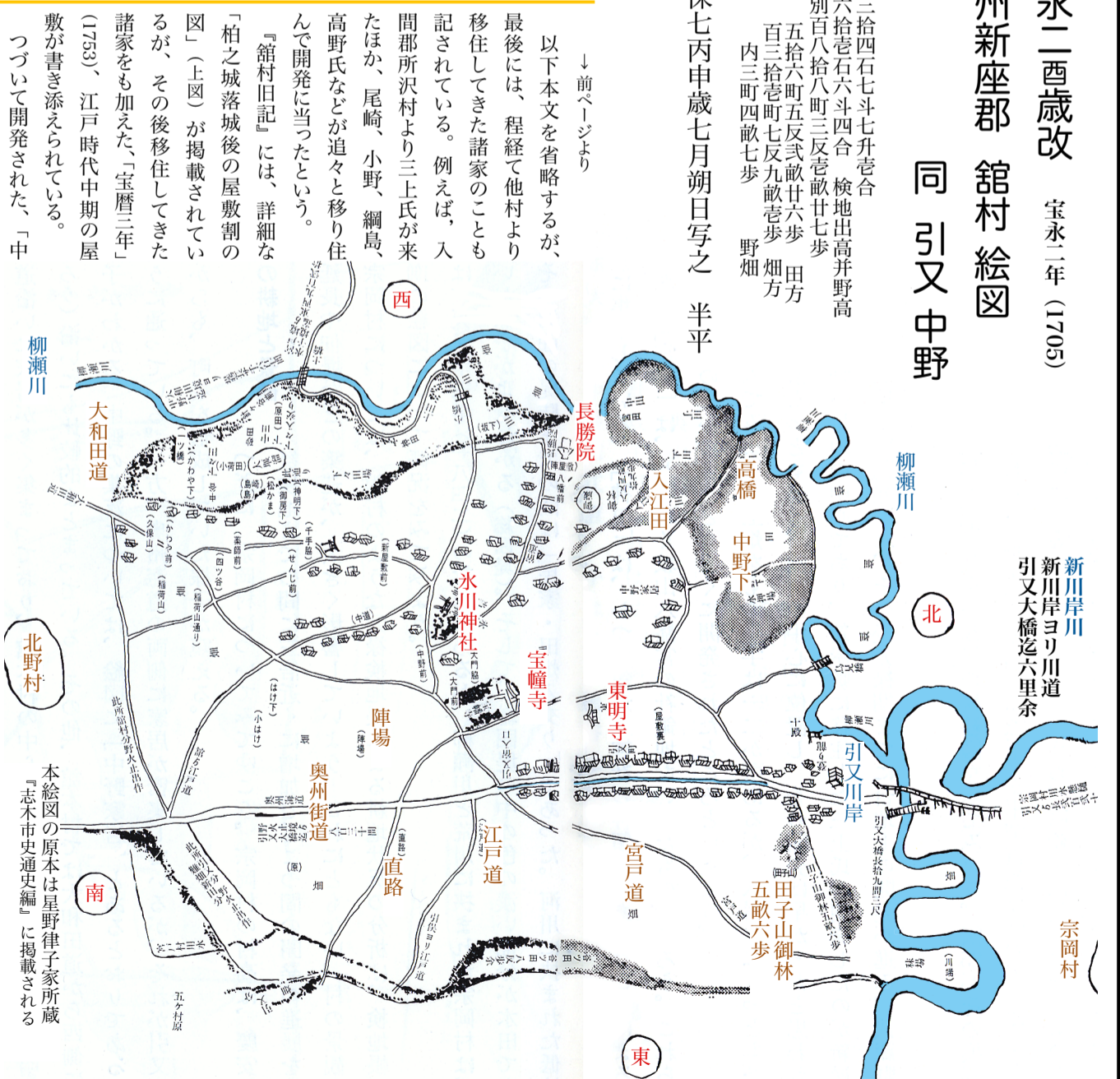
館本村から引又村が分村される……

その経緯については、四・十三 館本村開発之残田地引又新田之事(但し引又は天正四年之開発) 八附、三上氏一族の事、星野氏、村山氏の事、て祀られていたの下、柳瀬川の水の落ち口を綱を曳きながら跨ぐを以て、彼所の字を「引きまたぎ」と名付けた。古昔の歌に云く

四・十四 然るに右引跨新田は……

三上団左衛門が開発せし新田也。

安土桃山時代(天正四年ハ1576)慶長五年(1600)に入つて、志木市内のほぼ中央部に、館村を本村として引又村の開発が始まる。戦国世の転機となった、織



宝永二酉歳改 宝永二年(1705)
武州新座郡 館村絵図
同引又中野

一高千三拾四石七斗七升壹合
外六拾壹石六斗四合 検地出高并野高
此反別百八拾八町三反壹畝廿七步
内 五拾六町五反貳畝廿六步 田方
百三拾壹町七反九畝壹步 畑方
内三町四畝七步 野畑

天保七丙申歳七月朔日写之 半平

新川岸川
引又大橋迄六里余

宗岡村

